令和5年度　小平市立花小金井南中学校　学校評価報告書

学校教育目標　豊かな心を養い　学力、体力の向上を目指し　未来へはばたく人物を育成する
1．心身ともに健全で自らを鍛え努力する人　1．進んで学び　社会のために尽くす人　1．認め合い　支え合う心優しい人

目指す学校像（ビジョン）
【目指す学校像】　○居心地のよい学校　○分かる喜びのある学校　○あいさつが自然と出る学校　○保護者・地域から信頼される学校
【目指す児童・生徒像】○自己実現のために絶え間なく努力する生徒　○思いやりの心をもち、心も体も豊かな生徒
【目指す教員像】　○生徒一人一人を認め、伸ばそうとする教師　○生徒・保護者から信頼される教師　○生徒の自己実現を支援する教師

前年度までの学校経営上の成果と課題
成果：○授業規律の確立　○挨拶をはじめ礼儀指導　○基礎・基本の確実な定着と学力向上　○読書活動の充実　○不登校や特別な支援が必要な生徒への対応　○キャリア教育の推進　○ホームページの充実
課題：○家庭学習の定着　○地域連携

	具体的方策	第1回評価 取組指標	第1回評価 成果指標	成果・課題・対策	第2回評価 取組指標	第2回評価 成果指標	学校関係者評価	成果・課題・次年度以降の対策
学力向上	○小グループに よる学び合いを取り入れる。 ○ICT教材の積極的な活用を授業に取り入れる。 ○学年ごとの研究授業を学期に1回実施する。	4	4	前年度の取組より、主体的・対話的で深い学びを実現するために全教師が積極的に授業改善や評価方法などについて実践的な研修を進められたことや今年度から2年間小平市研究推進校として、GIGAスクール構想で生徒に貸与された学習者用端末の活用やグループ活動を取り入れた授業研究を行い、教師がどのような授業を行えば主体的に学習に取り組む生徒を育成できるのかということをテーマに研究を進めている成果が出ている。教師間の情報共有システムを確立し、さらによりよい授業実践を進めていく。	4	4	生徒が主体的に学習に取り組むために授業改善をしてきた経過や成果を聞き、きめ細かい対応と熱意を感じた。家庭学習が習慣化されていない生徒には放課後教室の利用を促すとしているが、家庭学習をすることが難しい生徒がみんな放課後教室を利用できるかといえば、そうはできなかったり通いにくいと感じたりする生徒も多数いると感じる。放課後教室に何年か携わっていると、教室に来る生徒はそれなりに目標を持って、そこでどれだけの勉強をしよう、というような意識の高さを感じるお子さんが多いように感じています。生徒がより興味を持って自主的に参加しやすい環境づくりをしていかないと、今後も変わらないのではないかと感じる。	小平市教育委員会研究推進校として、「主体的に学習に取り組む生徒の育成」というテーマで2年間の研究を終えるが、教師の授業改善の意識は高まり、小グループによる学び合い活動やICTの積極的な活用などは大きく前進した。また、研究発表会において見ていただいた本校の授業は大きな成果として評価していただいた。生徒のアンケートからも主体的に学習に取り組むとはどんなことなのか理解し、やろうという気持ちがみることができた。令和6年度も継続して授業研究に取り組んでいく。
	○朝読書の始業前からの読書活動を実施し読む力を向上させる。 ○家庭学習の定着のために、各教科で課題を作成し、授業の振り返りをさせる。 ○定期テスト前における家庭学習の計画と実施の学習指導を行う。 ○放課後学習教室を毎週水曜日に実施し、授業の振り返り等を行う。	3	3	家庭学習の定着を図るため、課題の質や量について、教科を越えて調整をすることを進めてきたことは、生徒の負担軽減だけでなく、生徒個人が必要としている家庭学習に取り組むことができるような状況を作り出しつつある。一方で家庭学習の習慣化がされていないような生徒については、個別の面談などを通じて、働きかけることや今年度から実施している毎週1回行われる放課後学習教室を利用し、学習の習慣化をさらに進めていく。	3	3		家庭学習の定着を図るため、課題の質や量について、引き続き教科を越えて調整をすることを進めることができた。家庭学習の習慣化については、今後も課題として検討していくことになるが、家庭学習が習慣化されていないから放課後学習へということではなく、何のためにどんな目標をもって学習に取り組むのかなど、生徒に考えさせながらその生徒にあった学習方法を支援するような対応を目指していきたい。令和6年度は学習者用端末の活用で、家庭学習の定着を図りたい。
健全育成	○生徒会が主になり生徒朝礼の計画的な運営と実施を行う。 ○定期的にあいさつ運動を実施するとともに日頃からの声かけを行う。	3	4	生徒会活動の自主性については、これまでの伝統的な積み重ねと、コロナ禍でできることを模索する中でさらに前進している。これは生徒自身よりも指導や支援をする教師側が強く感じていることであり、機会があることに生徒にはその素晴らしさについて伝えていくことが大切である。あいさつについては、校内でのあいさつだけでなく、地域でのあいさつが自然にできるような生徒の育成を今後の課題として進めていく。	3	4	校内で生徒の姿を見ても、まだ、なかなか自然と挨拶が出来る生徒が少ないと感じた。制限のある中でも、学校で見ようとする生徒や学校の雰囲気は明るく、花南中学校のよき伝統が受け継がれていて頼もしいと感じている。現在のいじめのほとんどがSNSであるという報告から、いじめる側の生徒の気持ちが溶けていくまでの葛藤を重く受け止めた。現代を生きる生徒や親御さんは大変な時代に子育てをしている。素直に声をあげられる人を地域の力で少しでも守ってあげられたらと思う。 学校内行事を通して、様々な体験を重ね、人間性を高めていく事が望ましい。学力と共に人としての成長は中学時代に培われることが大きい。	生徒会活動は、生徒が主体となって進めるということが新たな伝統になってきている。コロナ禍で工夫して創り出した取組をうまく進化させている。挨拶については、生徒の意識と教員の求める姿に差があることがわかっているので、生徒の意識を教員の求める姿に近づかせるように、生徒会等を通じて働きかけていく。
	○学校行事、生徒会活動等において生徒の活躍の場を増やすことにより、より良い人間関係を形成する能力を向上させ、いじめのない学校を推進していく。 ○生徒の心の育成を推進し、特別な教科道徳の授業を充実させる。	3	4	制限のある活動が続いていることから、学年を越えた集団での学校行事などが行えず、目標となるものが見えにくい中で2年間が経過しているが、今年度になって、学校行事などについては、コロナ禍以前と近い形で実施できるようになってきている。人間関係の形成や、リーダーシップを育てることが他者との関わりの中で形成できるようになってきている。少しでも学年を越えて一緒に活動できる取組を増やし、健全育成を進めていく。SNSの規範意識については、概ね理解が進み、トラブルも少なくなっているが、入学する1年生から保護者も一緒にしっかりと指導し、対応していくことが必要である。	3	4		令和5年度は、新型コロナウイルスが感染症法上5類となったことで、運動会の学年種目の充実や合唱コンクールのマスクなしの合唱など、過去3年間できなかったことができるようになった。これまで以上に先輩の姿を後輩が見て見本にしたり、憧れたり、もっとより良いものを作りたいと思ったりと、体験による成長と人と関わることからの成長が大きく見られた。特別な教科道徳の授業も4年目となり、定着してきている。本校の研究ともタイアップしながらより良いものにしていきたい。
体力向上	○目標を超えた生徒に対して表彰するほか、努力した成果を目に見える形で朝礼や学校便り、体育科便り等で周知することで意欲や成就感を高める。 ○授業や行事を通して生徒の運動への意識と技能を高める取組を行う。 ○持久力の向上を中心とした取組を継続して行う。	3	4	普段の体育の授業や部活動を通じて、持久走や補強運動などに取り組み、成果を上げている。持久走の取組については、体力向上のみならず、目標を乗り越えようと限界に挑戦したり、自分自身をコントロールしたりする力もついている。今後も引き続きこのような取組に力を入れていく。生涯スポーツなども考慮し、運動の苦手な生徒への関わりも丁寧に行っていく。	3	4	積極的に取り組んでほしい。体育の授業に加え、部活動での積極的な関わりは基礎体力の向上につながる。学習に臨む際の頑張りも体力があってこそである。花南中といえば持久走！12分はきつい、と言う意見があったが、自分の出来る範囲を少しでも拡げる努力をしてほしい。	これまでの数年間、普段の体育の授業や部活動を通じて、持久走や補強運動などに取組み、成果を上げている。寛容な時代であり、無理をさせないことが必要であることは理解しているが、持久走の取組を通じて、体力向上のみならず、目標を乗り越えようと限界に挑戦したり、自分自身をコントロールしたりする力もついている。今後も引き続きこのような取組に力を入れていく。
キャリア教育	○3年間を見通したキャリア教育を通じて望ましい勤労観・奉仕の精神を育成する。 ○係活動や委員活動を充実させ、自ら判断し主体的に行動できるようにする。 ○地域へのボランティアなどの情報を周知し、ボランティアへの参加機会を増やす。	2	4	中学校3年間を見通してたキャリア教育の計画をコロナ禍で少しずつ見直しながら2年間が過ぎた。この間にさまざまなアイディアを出しながら進めてきたキャリア教育の取組が財産となっている。職場体験がなど体験活動などができるようになっていったことは生徒の成長に大きくつながっている。	3	4	高校入試のWEB出願を経験し、難しかった。2年生のうちから資料でも保護者会等で情報あると良い。職場体験やボランティア体験も実際にやってみることで生徒の財産になってほしい。急激に変化する時代となり、今ある職業が未来にはなくなっていることだってある。だからこそキャリア教育は大切である。 進路については、学校任せではなく、保護者も自ら研究していくように働きかけることが必要である。	コロナ禍で3年間を経験し、体験的な活動ができない中で、少しでも生徒にとって職業など今後の生き方について学ぶ機会を得られるような活動を考えて実践してきたが、令和5年度は、職業体験などの体験的な学習ができるようになったことで、実際に体験して学ぶ機会が増えたことから、生徒の成長が感じられた。令和6年度もコロナ禍で行った取組と体験的な学習の両面で生徒を育てていく。
	○系統的な進路指導や情報発信を行う。	4	3	進路指導に関わる情報発信の方法は、コロナ禍で大きく変化している。対面で説明会ができないようなことも多く、動画配信などの工夫により、成果があった。1，2年生の保護者向けの進路説明については、3年生の生徒保護者向けに実施した進路説明会の動画を配信したが、とても好評であった。見学や体験をせず上級学校を学力だけで判断して決めてしまうようなことにならないように、「行ける学校ではなく行きたい学校」という視点を大切にして進路指導を進めていく。	4	3		都立高校の入試制度がこの3年間で大きく変更された。教員も少しずつ対応がスムーズにできるようになってきた。保護者アンケートからも、進路指導などについて、早めに知りたいという意見が多く見られた。今年度は進路説明会の実際の動画を配信し、1，2年生の保護者に見ていただけるようにした。令和6年度も、3年生になる前に、早めに意識付けをしていきたい。また、これまで同様に「行ける学校ではなく行きたい学校」という視点を大切にして進路指導を進めていく。
特別支援教育の推進	○特別支援委員会を中心とした組織的な取組（SSWやSCの積極的な活用）を行う。 ○特別支援教室専門員を活用し、特別支援教室と通常の学級の連携を強化する。週に1回の担任と専門員の情報共有を行う。	3	3	特別支援教室の完全実施3年目となり、特別支援教室専門員の配置や、巡回校の指導担当教師のご協力により、特別支援教室に通室する生徒の情報共有や支援方法などの連携は格段によくなった。特別支援委員会に特別支援教室専門員と巡回校の教員が参加することで、多くの情報が、学校全体に伝わることも大きな前進であった。特別支援教室に限らず、支援が必要な生徒は多くなる傾向は顕著なので、今後も特別支援委員会の充実を図り、支援体制をさらに高めていく。	3	3	保護者の方のご意見から、「特別支援学級をもっと知りたい」とより感じい意見だと感じた。運動会の様子を拝見しましたが、特別支援学級との交流を通して正しい理解が進んでいると感じた。不登校生徒に対しても特別支援委員会で検討し、学校として組織的に対応しているように感じる。中学校を卒業後、それぞれが社会生活が出来るような環境が作り出せたら良い。	特別支援教室も3年目が終わり、校内での連携も円滑に行えるようになってきている。今年度は、別室登校のシステムを構築し、別室登校を重ねて教室へ復帰する生徒も出てきている。また、リモート授業配信から学級とのコミュニケーションが取れることができた生徒も多く、教室復帰に役立てることができた。この2つの取組は大きな成果であった。特別支援教室に限らず、支援が必要な生徒は多くなる傾向は顕著なので、今後も特別支援委員会の充実を図り、支援体制をさらに高めていく。
	○通常の学級と特別支援学級において行事等での交流を進める。 ○通常の学級生徒への理解教育を推進する。1年生への特別支援学級の理解教育を実施する。また、行事等を中心とした交流を進め、生徒の共生社会への意識を高めさせる。 ○不登校対応として別室登校の組織的な運営を行う。	3	4	特別支援学級の理解教育は定期的に行われ、通常の学級の生徒へのアンケートなどでも「特別支援学級の生徒との交流をしたい」という割合がとても多い結果が出ている。運動会や学年集会での交流、さらに通常の学級と特別支援学級の教員の交流なども進めていく。地域にも自立支援施設などがあることなど、共生社会に向けてさらに意識を高めさせていく。	3	4		運動会や合唱コンクールなどで、通常の学級と特別支援学級の活動を直接見合うことができたことは大きな成果であった。また、昨年度に引き続き、ソーラン節の発表会では、2年生と特別支援学級が同じ課題に取組み、発表ができたことがとても素晴らしかった。令和6年度はさらに、生徒の直接交友なども視野に入れて、互いの良さを認め合うことができる取組を実施していく。
働き方改革	○配信メールやPC等を活用し、普段の業務の軽減や授業準備等の軽減を図る。 ○スクールサポートスタッフや地域人材を積極的に活用し、公務軽減を図る。 ○教職員の自己申告面接の中で、担当行事等の見直しを提案し、1年間かけて精査する。	3	3	最大の成果は、スクールサポートスタッフの活用が格段に進んだことによる教師の負担軽減である。信頼できる人材がこのような立場で学校に関わることがどれほど力になるか多くの教師は実感している。保護者向けの通知文なども保護者の理解を得てメール配信で済ませるようにしている。都型のコミュニティ・スクールに移行し、地域の人材活用がさらに進んで、教師の働き方改革がさらに進んでいくことを目指す。	3	3	コロナにより社会・人々の意識は変わった。これを機会に業務改善し、働き方を変えるべきである。しかし、学校評価上での働き方改革は教員だけでなく、学校に関わる地域の人も働きと捉えることも必要である。スクールサポートスタッフやボランティア、コーディネーターの力を今以上に活用する事で、先生方の働き方改革が進む事を期待する。配信メールを活用して、様々な情報をタイムリーに発信している。コミュニティ・スクールの良さ、利点をいかしていくとよい。	スクールサポートスタッフや学生ボランティアを有効に活用し、教員の業務軽減につながった。また、メール配信の活用などから、業務自体の軽減もさらに進んでいる。令和6年度は、部活動の地域移行なども具体的に取組が検討されることになると思うので、中学校の教員の最大の業務改善に向けて部活動について議論を進めたい。また、コミュニティ・スクールでも地域人材の活用について話題にしていきたい。
	○地域教育コーディネーターを活用し、地域人材が積極的に関わるような取組を行う。 ○職場体験を地域学習コーディネーターが調整する。	3	3	放課後学習教室については、定期的に実施することができた。定期的に実施することにより安心して学べる場所を提供することができるので、今年度はできるだけ定期的に実施したい。検定試験については、大きな成果を上げているが、地域との連携を目指し、コミュニティ・スクールでの運営に移行できている。	3	3		地域教育コーディネーターを活用し、地域人材を学校に取り入れた取組を増やしていくことができれば、これも教員の働き方改革につながっていくはずである。令和5年度の職場体験では、地域教育コーディネーターの方に体験先との調整をお願いし、成果をあげている。教員が計画を立案し、その計画に地域人材を取り入れるという視点をもち、地域と共に生徒を成長させる学校につなげていきたい。その結果として働き方改革にもつながると考えている。
コミュニティ・スクール	○防災危機管理課と連携し、避難所運営マニュアルを完成させる。（地域防災分科会） ○検定推進委員会を組織的に運営する。（学習支援分科会） ○地域や保護者の相談窓口となる「花みなみカフェ」を定着させる。（家庭支援分科会）	2	3	昨年度の都型の学校経営協議会から引き続き、3つの分科会を継続し、それぞれの分科会でメインとなる取組についてさらなる検討を進めている。実際にやってみた中で課題を見つけてさらに前に進めていきたい。情報発信はできるだけ、メールや通信を発行して地域や保護者に周知していく。	2	3	会議を重ねるたびに、様々な意見が出てきて、徐々に活動が盛り上がってきた感じがある。手探りで始まった3つの分科会がそれぞれ活動を進め充実させる事で新たな課題も見えてくる。	令和5年度は、3つの分科会でそれぞれの取組を運営してきた。令和6年度は、形になってきているところをさらに進めていきたい。また、部活動地域移行、地域人材を取り入れた教育活動などについて、話題にしていく。